

# 平成 28 年度特別企画展 「宮島の植物」について

泉川康博・木原靖正・久保晴盛・山本昌生

## はじめに

当園では、毎年テーマを変えて、2～3ヶ月程度の長期展示を特別企画展として開催している。平成 28 年度は、厳島神社が世界遺産に登録されて 20 周年の節目にあたるため、宮島の植物をテーマにした特別企画展を開催することとした。10 年前の平成 18 年度にも、特別企画展「世界遺産宮島の植物展」を開催しているが、10 年前と比べると、ラムサール条約登録湿地の指定や、より進んだ鹿害対策など、新たな話題があり、宮島をテーマとした企画展を再び開催することに意義があるように思えた。

## 展示内容の検討

平成 24 年に、宮島の海岸線の一部がミヤジマトンボの生息を理由としてラムサール条約の登録湿地の指定を受けたことは、宮島の貴重な自然についてあらためて考えさせられる良い機会となった。しかし、トンボは植物ではないので、植物園の展示として大きく取り上げるのは如何なものかという考えも当初あった。しかし、ミヤジマトンボが生きていくために必須の植物とされるヒトモトススキとの関係、あるいはそれらを取り巻く自然環境とその保全について、市民に知っていただく良い機会だと思い、今回は多くのスペースを使って紹介することとした。

また、宮島は「神の島」と崇められ、農業が禁止されていたことは一般にもよく知られているが、実は少なくとも江戸時代には森林利用の歴史があったことはあまり知られておらず、この機会に紹介することとした。

また、宮島は野生のシカが間近に見られる数少ない観光地として全国的に有名であるが、シカの存在は宮島の植生に大きな影響を及ぼしており、近年の鹿害対策と併せて紹介することとした。

また、植物学的な見地から、実物の植物標本の展示や標本庫の紹介、近年の植物分類体系の見直しなどの話題もパネルで紹介することとした。

上記以外では、10 年前の企画展の内容を再び紹介することとした。

## 取材活動

広島大学大学院理学研究科では、附属施設として宮島の島内に宮島自然植物実験所を設置しており、平成 28 年現在で設立 50 周年に当たる。実験所のスタッフは、島内の植物事情に最も明るく、10 年前の企画展でも協力をいただいたことから、今回の企画展でも協力いただくことになった。島内の倒木の輪切りやハイノキ属の植物標本 6 点を借用した他、島内で撮影された貴重な植物の写真や、実験所が発刊した刊行物など、多数の資料を提供していただいた。また、実験所に勤務されている広島大学大学院理学研究科准教授の坪田博美先生には、島内の植物観察会の講師をしていただけたこととなった（後述）。

ミヤジマトンボ関連では、長年ミヤジマトンボの保護に取り組んでいる広島市森林公園こんちゅう館の坂本充氏に、詳しい話を聞かせていただくとともに、今回の企画展のために新たにミヤジマトンボの生態映像を撮影していただき、写真数点も提供していただいた。また、実物のヒトモトススキを 5 株借用し、パネルとともに展示した。広島市森林公園こんちゅう館と協力して生息域外保全に取り組んでいる宮島水族館の沖幸祐氏からも、ミヤジマトンボの保護と展示への活用について話を聞かせていただき、写真を提供していただいた。



写真 1 ミヤジマトンボの紹介コーナー

宮島歴史民俗資料館に江戸時代の宮島の森林利用に関する資料や展示品があると聞き、同館の高橋修三研究員と東口茉佑子学芸員から資料

を教えていただくとともに、実際に島内で使われていたタテ引きノコギリ1点を借用した。



写真2 宮島で使用されていたタテ引きノコギリ

### 展示造作について

来園者が展示資料館のロビーに入ると、展示室の入口が左手に見えるが、思わず中に入って見たくなるような仕掛けを考えた。宮島の印象を決定付ける大鳥居の縮小模型を入りに置き、その背後に海側から見た引き潮時の入り江と海上神殿、さらには背後の弥山が写っている大型のパノラマ写真を配し、宮島の神々しい世界に引き込まれていくような印象の造作にした。柵などは敢えて設けず、模型の中に来園者が入って記念撮影ができるようにした。実際、展示期間中は、多くの来園者が大鳥居の縮小模型の前で記念撮影をする姿を見ることができ、この試みは成功したように思う。



写真3 入り口の大鳥居縮小模型とパノラマ画像

また、展示室奥には大鳥居の主柱脚部のほぼ実物大の模型を設置した(床面の直径3m、円筒部の直径1.8m)。これにより、大鳥居のスケールの大きさを間近で体験していただくとともに、主柱が樹齢600年を超えるクスノキで出来てい

ることを知っていただくなど、植物の雄大さを感じていただける内容となったと思う。



写真4 大鳥居主柱脚部の実物大模型

### 植物標本の展示について

宮島自然植物実験所から借用した標本に加え、当園の標本庫で保管されているものを合わせて、島内で過去に採取された計17点の標本を展示した。この中には、1970年代に島内では絶滅したと考えられるコケセンボンギクの貴重な標本も含まれている。



写真5 コケセンボンギクの標本 1951年10月に植物学者堀川芳雄氏が島内で採取したもの

### 2回の講演会について

本企画展に関連して、自由参加の2回の講演会を開催したが、1回目は10月23日(日)に「世界の島々から見た宮島」と題して、広島大学

名誉教授の関太郎先生にご講演いただいた。宮島を「島嶼（とうしょ）植物学」の観点から、隔離された環境下での植物の進化の傾向や植生の特徴を解説いただいた。一方、宮島を含む日本列島が、かつて大陸とつながっていたことを示す植物の存在にも触れた。先生が講演会の前に訪れた、スペインの離島カナリヤ諸島の特殊な植生なども紹介された。参加人数は50名で、ヒコビア会関係や関先生を古くから知る人が多かったようだ。

2回目は12月4日（日）に「世界遺産20年宮島をどう守る」と題して、中国新聞社論説副主幹の岩崎誠氏にご講演いただいた。雨にもかかわらず32名の参加者がおり、宮島の関心の高さがうかがえた。なぜ宮島が世界遺産に選出されたのか、そして世界遺産の意義とは、など詳しい解説があった。宮島にはまだ解明されていない謎も多くあり、今後の研究が待たれることや、観光地のいわゆる「オーバーユース」問題などの話題もあった。現在宮島に発生しているさまざまな問題を取り上げ、素晴らしい遺産をどのように未来に引き継いでいくのか考えさせられる内容であった。



写真6 講演会の様子 関太郎氏（左）と岩崎誠氏（右）

#### 宮島植物探訪会について

もう一つの関連企画として、11月19日（日）に事前申込制の「宮島植物探訪会」を開催した。当日の天気予報は大雨であり、朝9時に宮島大元公園に集合したときは雨混じりで、残念ながらキャンセルが相次ぎ、定員40名のところ、28名のほどの参加となった。程なく雨は止み、講師の坪田博美先生の植物解説を聞きながら、多々良を経由して、宮島自然植物実験所までの約4kmの道のりを、4時間かけて進んだ。コース

の全長が広島大学の敷地内にあるため、樹木ラベルが整備されており、列の後ろのほうでも解説のあった植物の観察がしやすい状況であった。実験所に着くころには完全に晴れとなり、快適に散策することができた。実験所内で昼食を取り、午後2時に宮島大元公園に向けて出発し、午後3時20分頃の解散となった。



写真7 宮島植物探訪会の様子 解説する坪田博美氏（右手前）

#### 最後に

本企画展のために、多くの関係者から多大なご協力をいただき、この場で感謝を申し上げたい。筆頭執筆者である担当者は、実のところ宮島の歴史や島内の植物事情にそれほど詳しくはなく、手探り状態での展示準備期間であったが、宮島に残された貴重な自然を前に、神の威光のようなものを感じた。展示期間は当初10月1日から12月23日までの73日間の予定であったが、冬の夜間開園が12月25日まで延長されたことに伴い、実質的に25日まで延長した。期間中の総入園者数は、56,700名であった。この企画を通じて宮島の歴史や文化、そして自然環境を後世に引き継いでいくために、よりいっそうの知恵と努力が求められていることを痛感した。なにより、多くの方に宮島の現状と課題を知っていただく必要があり、本企画展が、多少ともその一助になったであろうことを願って止まない。